

2, 3種の保持薬が発売され又厚生省でも其の使用法に依り無害許可されています。

本所でも未だ予備試験の域ではあるが、其の薬品の効果に就いても比較調査を試み、少量ながら実施することにした。

## 有用介藻類、刺皮動物の資源調査

琉球近海に於ける有用介藻類及び刺皮動物の産息状況を調査して将来これ等の利用開発の資料に供せんがために、前年度より継続事業として実施した。

### 1. 具志川村、仲里村沿岸

調査場所及び期間

場 所 嘉手苅地先、烏島地先、後間地先、荒浜地先

期 間 1958年6月8日～6月14日 7日間

調査方法 現場踏査、刺舟、漁民より聴取

### 2. 生産調査

種 類	盛 産 期	年間生産高 及 統 数	利用価値の調査	備 考
高浜貝、夜光貝 広瀬貝、玉貝	5月～8月頃	現在刺舟 1隻1日200斤位	貝肉は自家消費 貝殻は販売	
海人草	7月～8月頃	年 間 生 4000斤位	島内需要	
ひとえくさ	1月～4月頃	不 明	乾燥販売	
も づ く	3月～5月頃	4500斤程度	利用者なし	
ばみんろに	7月～9月頃	不 明	肥料程度	
なまこ	周年	3500斤位	、	

### 3. 調査地区内に於ける水産加工業者の有無

琉球太もづく、昭和15年頃静岡県農人吉岡氏が塩蔵もづくとして、日本向け輸出したが現在は皆無。

### 4. 調査経過

(1) うに資源について

うに類の分布は具志川村地先から仲里村地先リーフ帯に群棲しているが身入状態が悪く成熟期は7月～9月頃と思考される。地元漁者はこれか利用面に無関心で殆んど肥料として使用している。

ロ) なまこ資源について

なまこ類は具志川村地先内湾及磯間地先一帯の内湾に産し、其の種別  
にじやのめなまこ、ふじなまこ、あかみしきり、梅花なまこの4種が見受  
けられたが、主としてじやのめなまこが主位を占めているように思われた  
従来地元民は、これを利用するものが少なく、殆んど、うに同種肥料として  
いる。

ハ) 貝類資源について

本島に於て重要な貝類は高瀬貝、広瀬貝、夜光貝、玉貝である。  
高瀬貝は兼城地先の中干瀬を経て、浮干瀬、前干瀬に至るリーフの外洋  
10尋〜18尋に多く、玉貝、広瀬貝は同リーフに沿うて2尋〜4尋程度  
の処、夜光貝は具志川村地先の西干瀬一帯にも棲息しているが特に中干瀬  
を経て浮干瀬に至るリーフの中洋2尋〜7尋の処に多く棲息している。  
平均重量は1斤〜1.5斤程度である。採集に動力付刺舟を使用して、午前  
5時〜午後5時迄、1隻3人乗りで平均漁獲は2.5斤程度と云われている。  
貝殻に仲里村漁協組合に納入の場合は、高瀬、夜光貝は斤当り4.5円、広  
瀬貝は1.5円、玉貝は4円であるが中間業者渡の場合は高瀬、夜光は5.0  
円、広瀬貝は2.0円、玉貝は5円である。玉貝は量は多いが、安価のため  
殆んど採取していないようである。

ニ) ひとえぐさ(アーサ)資源について

ひとえぐさは久米島のリーフ岩盤、岩石に時期的に着生するが特に具志  
川村リーフ岩盤が多いようである。尚、リーフ、岩盤、岩石に着生して  
いるために砂及び雑草が少なく、質に於ては良好といわれている。  
地元民は乾燥、販売又は夏時の野菜切目におかず程度として使用している。

ホ) 海人草資源について

海人草の棲息地は雨の降より磯間部寄地先で浮干瀬(ウキビン)東部一  
帯と中干瀬の外洋側一帯及西干瀬、南部内側一帯に多い。  
尚具志川大原地先俗称鳥島周辺にも着生するようであるが、前者に比し極  
少である。中干瀬、外洋一帯の海人草は草丈は長いと云っているが水深7  
尋〜10尋で深いので採取するものなく、漁場として使用されていないよう  
である。

ヘ) 琉球もづく資源について